

## 杜 子 春 （唐代伝奇）

佐藤 良士

「杜子春」は言うまでもなく、芥川龍之介の名作だが、唐代に書かれた「唐代伝奇」の一遍を元にした物語で、こちらの杜子春も、話の筋立てはほとんど同じです。

芥川の杜子春は、世間の空しさに絶望して、人間の情を絶って神仙界の仙人になろうとするのですが、最後に「母親の我が子を思う言葉」で人間界に引き戻されてしまうという物語。唐代伝奇の杜子春は、果たして神仙界の住人になれたのでしょうか……………。



冬の日暮れ時である。一人の男が長安の街の中をとぼとぼと歩いていた。名前を杜子春といった。杜子春は若いときから放埒で、道楽の果に財産を使い果たして、今夜の寝る場所もないままに、さ迷っていたのである。

東市の西門で、空を仰いでため息をついたとき、一人の老人が現れて訊ねた。「なぜため息をついていなさる？」

杜子春は友達の不実をなじり、親戚が薄情だと憤慨した。すると老人は「いくらあったなら、足りるのかな？」と、言った。

「三万か四万もあれば、やっていけましょう」

「それでは足りまい。ここに錢一貫ある。今夜の分だ。残りは明日の正午、西市のペルシャ人屋敷で待っている。時間に遅れないように」

その時刻に、杜子春が約束の場所へ行くと、一人の盲人が彼に錢三百万貫を与えて、姓名を名のらないまま立ち去った。

さて、金持になった杜子春はまた浮気の虫が起こった。駿馬に乗り、贅沢な服装をして、酒飲みの仲間を集め、長安の妓楼に出入して歌舞音曲の歡樂に耽った。

またたく間に錢はなくなっていき、やがて元の木阿弥になって、杜子春はまた長安の街の東市の西門で、空を仰いでため息をつき、自分の運命を欺いていた。

すると、老人が現われ、杜子春の手を握りしめた。

「あなたは、また、この有様になられたのか！ 珍らしいことだ。もう一度、助けてあげましょう。明日の正午、この前、約束した場所に来なさい」

杜子春は、恥を忍んでそこへ行き、錢一千万貫を受けとった。

現金を受け取る前は、さすがに彼も決心した。これからはこの錢を元手にして土地家屋を購入し、商売をはじめ大金持になってみせると。だが、手に入ってしまうと、がらりと気持が変わった。放埒で、歡樂にふける浪費癖は相変わらずであった。一、二年もたたないうちに、昔にもまして貧乏になった。

三度、杜子春は同じ場所で老人に遇った。さすがに今度は、杜子春は恥ずかし

くなくて、顔を手でかくして逃げかかった。老人は裾を引っ張り彼を止めた。

「あなたは、本当に生活の仕方が下手だなあ！」

そう言いながら、杜子春に錢三千万貫を与えた。

「これで直らなかつたら、あなたの貧の病いは救いようがない」

杜子春は考えた。自分は放埒でどうしようもないが、この老人は三回も助けてくれた。どうやって報いたらよいだろう？ そう思った杜子春は、

「このお金をいただいたら、私は世の中に対する義務を全うすることができます。それが出来たら、貴方のおっしゃることはなんでも致しましょう」

「それが、わしの望むところだ。あなたの用件がすんだなら、来年の中元(お盆)老君廟の二本の大樹の下に来なさい」

杜子春は故郷の揚州に行き、田畑を買い、百余間の家を建てた。そして彼の一族中の孤児や寡婦を呼びよせた。さらに、甥や姪をそれぞれ結婚させ、他<sup>ほか</sup>処で埋葬された同族を先祖の墓地に合葬させた。恩を蒙った者に恩を返したのである。

こういう事をすませた杜子春は、指定された日に、老君廟へ出かけた。

老君廟では、老人が杜子春を待っており、連れ立って華山の雲台峰に登った。光り輝く峰の上に、一軒の家があった。雲が家を取り巻いて漂っていた。

正面の広間に、高さ九尺ほどの仙薬を作る炉があった。紫の焰がさかんに燃え、九人の王女が炉を囲んで立ち、青竜と白虎が前と後に控えていた。

日が暮れかかっていた。老人は、白い石の丸薬三粒と酒一盃を杜子春に与えた。

「心を慎めて、何が起ころうとも言葉を発してはならない」

杜子春は虎の皮が敷かれた西の壁際に座り、目を閉じると心を鎮めた。

「悪鬼、夜叉、猛獣、地獄が現れて、あなたの肉親が数々の責苦に苦しもうとも、すべては真実ではないのだ。ひたすら動かずに、無口でいなさい。恐れずに、落着いていなさい。結局はなんの危害も受けないのだから。ひたすら心の中でわしが言ったことを念じていなさい」

言い終わるや、老人は風に乗って立ち去った。

老人が立ち去るや否や、何千台もの車、何万騎もの騎馬の武者が丘から谷にかけて満ち溢れて押しよせ、雄たけびの音が、天を揺り動かした。

「おまえは何者だ！よくも大將軍の御前にしゃしゃり出てるな」

身の長一丈あまりの大將軍が刀を振りかざし、杜子春に問いかけると、左右の衛士が、剣をふりかざして前進し、姓名を問いつめ、さらに、そこで何をしているのかと詰問した。杜子春が一切答えなかつたので、烈火のように怒った將軍は斬り殺せ、射殺しろと叫んで、怒りに荒れ狂って立ち去った。

つぎに、猛虎や毒竜、何千何万という<sup>まむし</sup>蝮<sup>さそり</sup>が現れて、杜子春に噛みつこうとした。しかし杜子春が表情を変えなかつたので、暫くすると退散していった。

やがて、土砂降りの大雨になった。真暗闇のなか、雷が鳴り、稲妻が走った。

杜子春の左右を火の輪が廻り、前後を稲妻が転って、目を開けていられなかった。まもなく、中庭は水深一丈あまりになって、山が崩れ洪水が押し寄せたが、杜子春は端坐したまま、目もくれなかった。ほどなく、洪水も消え去った。

将軍が、ふたたびやって来た。牛頭の獄卒や、奇怪な容貌の鬼神を引きつけて、熱湯が煮えた大きな鉄鍋を杜子春の前に据え、周囲をぐるりと取りかこんだ。

「姓名を名のらなければ、心の臓を又でつき刺して鍋に投げこむぞ」

だが、杜子春は、返事をしなかった。

そこで杜子春の妻を捕らえて来て、階下に据え、妻を指さしながら、

「姓名を申したなら、女房は助けてやる」

彼らは、妻を鞭打ち、あるいは弓で射、あるいは刀で斬り、あるいは鍋で煮、あるいは焼き、耐えられない苦しみを与えた。杜子春の妻は、号泣して叫んだ。「わたしは、あなたには不釣り合いな妻ですけど、あなたに嫁して十年あまりになりました。いま、鬼様に捕らえられ、過酷な責め苦しんでいます。あなたが、ただ、一言仰っていただけたなら、生命が助かります。人間はどんな人でも情があるのに、あなたは残酷にもたった一言を惜しむのですか」

妻の雨のような涙を流し夫に毒づいた。将軍は、妻の脚を斬り落とし、突き碎いた。妻は苦痛のあまり、泣き喚いたが、杜子春はついに無視したままであった。

「この悪党は妖術をもう心得ておる。長く世の中においてはならぬ」

将軍は、左右に命令して、杜子春を斬らせた。

杜子春は斬られてから、その魂たましいは閻魔王の面前につれてこられた。

「これが雲台峰の妖術使か」

閻魔王は、そう言うと、急いで身柄を牢獄にひきわたした。杜子春は、熔けた鋼の汁を飲み、鉄の杖で叩かれ、ひき臼でひかれ、地獄の貴苦をつぶさになめた。

しかしながら、道士の戒めを心に念じて耐え忍び、ついに呻きもしなかった。

獄卒がすべての拷問をすませた旨、報告すると、地獄の王は言った。

「こやつは本当の悪党だ。男としておくべきではない。女として生れ替わらせよ」

それから杜子春は、女として生れかわり、宋州せんほ單父県の県令、王勤という人の娘になった。だが、病気がちで、針、灸、薬、医者、病苦に悩まぬ日は、ほとんど一日もなかったが、ついに一言も声を出さなかった。

まもなく美しい娘に成長したが、一言もものを言わなかったのが、彼女の家族は唾娘だと思った。親戚の男たちが言い寄ったが、彼女は一切応じなかった。

同郷の人で、慮という文人が、彼女の美貌を伝え聞いて、仲人を立て求婚したが、彼女の家族は唾を理由にしてことわった。だが、慮は、

「妻として賢くさえあれば、口を効く必要はない。口を効かないのは、おしゃべりな女に対するいいお手本になる」

とまで言ったので、家族は承諾して、二人は結婚した。

夫妻は、大変仲むつまじく、数年後には、男の児が生まれた。

慮は、子供を抱いて彼女に話しかけたが、返辞がなかった。ありとあらゆる手段を試みて口を開かせようとしたが、結局、無言であった。

「昔、賈<sup>かたいふ</sup>大夫の妻は、夫を軽蔑するあまり、一度も笑ったことがなかった。それにもかかわらず、夫が雉を射るところを見て、夫に対する不満を忘れて笑ったそうだ。私には雉を射る技はないが、文才や技芸は賈大夫より優れている。だが、とうとう一言もものを言わない。男として、妻に軽蔑されていて、その産んだ子供などいるものか！」

そう言うなり、子供の両足を持ち、<sup>くび</sup>頸を石に叩きつけようとした。その一瞬、杜子春の心に、子供に対する愛が生じた。突然、道士との約束を忘れて、思わず、「ああ！」と声を発していた。

杜子春はもとのところに坐っており、道士もその前にいた。

炉の紫の焰が屋根をつきぬけて燃えあがり、家屋は残らず焼けてしまった。

「書生めが！ わしをこんな有様にしくじらせた！」

道士は叫んで、杜子春のまげをつかんでひっさげ、水甕に投げこんだ。

「出てきなさい。あなたは、心のなかの喜び、怒り、哀しみ、慣れ、恵み、欲は、全て断ちきることが出来た。断ち切ることが出来なかったのは、『愛』であった。もしも、あなたが、『ああ！』という声を漏らさなかったなら、わしの薬も完成し、あなたも仙人になれたろう。わしの薬は、もう一度つくれるが、生身のあなたは、嫌でも人間の世に戻らなければならない。人間の世間の中で生きていくしかないのだ。しつかりおやりなさい」

杜子春は、溜息を一つ突くと、妻の待つ長安の小さな家に帰った。

## 何故、杜子春は女に生まれ変わったのか

唐代伝奇は、唐代に盛んに書かれた短編小説で、超自然的な事柄や、神仙、妖怪が自由に登場する怪異譚を扱った話だが、その中には人間や人生の本質を鮮やかな寓話として描かれている。なかでも「杜子春」はその代表作で、作者は牛僧儒(780-848)という、唐代の文学者といわれるが、異説もある。

この物語で語られる、男の杜子春が女になって転生するという筋立ては奇妙だが、実はこれに先行して同じ筋立ての話があり、そこでは男の杜子春は男に転生する。牛僧儒はそれを元に彼の「杜子春」を書いたはずである。

何故、牛僧儒は杜子春を女として転生する話に替えたのか、それは地獄でさまざまな責め苦や試練に耐え抜いた杜子春が、思わず弱い人間に戻って無言の誓約を破ってしまうのが「子供の死」だったからであろう。芥川の杜子春は母親の言葉で人間に戻ってしまうが、元の物語も親が子供を思う情で、「人間」に戻ってしまうのである。「子供の死」、それは母親にとって、どのような試練よりもつらいことであると、彼は言いたかったに違いない。